

生物

任期制研究者

研究機関研究職

大学教員

## 任期制研究者から私大教員へ

野呂知加子 (日本大学生産工学部応用分子化学科 / 大学院総合科学研究科生命科学専攻 / 医学部細胞再生移植医学 教授)

## 仕事の内容とやりがい

大学院卒業後から、当時では珍しかった任期制研究職を歴任。自分の意志で企画し、時間の使い方を含め、比較的自律的に研究できる環境に恵まれ、それぞれの職が楽しかったですが、任期終わりに近づくと次の職探しはそれぞれなかなか大変でした。最終的に理化学研究所の定年制研究職になりましたが、大学院修士の学生などを預かって研究指導するうちに、次世代に研究の楽しさを教える大学教育に興味を持ちました。今は私立大学教員として、自分の研究室を主催しています。研究と教育の他、一般の人や子供たちにわかりやすく生物学の楽しさを教えることや、次世代女性研究者が生きやすくなるような環境作りについても活動しており、忙しいけれども充実した日々を送っています。

## 仕事と家庭とのバランス

夫とは大学の同級生で、一緒に大学院受験して京都に行きました。そこで学生結婚して、博士課程の途中で長女が産まれました。長男は最初の任期制研究員時代に産まれました。子育てについては夫がこども大好きで、かなり協力的でした。家事は分担制で、比重としては私の方が負担していますが、肉体的労働を伴う家事は夫の役割となっています。私は中学時代からオーケストラでバイオリンを弾いており、家族も音楽が趣味でピアノやチェロ、フルート、歌など、いつも生活の中に音楽があります。子供は大学院生と大学生になりましたので楽になり、最近家事はさぼり気味です。仕事と家庭のバランスはライフサイクルでいろいろ変化します。

## 進路決定のきっかけ

中高一貫女子高で最初に出会った若い女性の生物の先生の影響で、いのちというものに興味を持ちました。医学部進学も考えましたが、当時は今と違ってシャイだったので、人と対する仕事よりは研究ができる理学部生物学科を選びました。中学高校の先生の影響はとても大きいです。次の転機は大学院進学で、ここですばらしい研究(細胞接着分子カドヘリン)に出会って、研究者・学者として生きようと思いました。自分の性格は、比較的、人の言うとおり毎日ルーティンワークをすることよりは、自分の意志で自分の行動を決め、他人と違う新しいことをしたい方なので、向いているかもしれないと思いました。

## 進路選択に対してのメッセージ

やはり人間は好きなことをやりながら生活できるのが一番です。小さい時から好きなことが決まっていた娘は、一浪して執念で獣医学部に入りました。今は医学系大学院博士課程で勉強しています。一方息子の方は、数学を勉強していますが、好きなこと探しに時間がかかっているようです。人はそれぞれ、これだ!という進路や職業および人に出会うタイミングが違うと思いますので、いつもアンテナを張って、いろんなことに挑戦してみてください。また、遊びたい!という気持ちや趣味も、働くための原動力になるように思います。Never Give Up!

## 海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

英国ケンブリッジ大学に2年間留学して良かったことは、まず、自分の研究力や英語力が海外でもそこそこ通用することがわかって、自信がついたことです。それから、研究の進め方やディスカッションの方法について、学んだこと。ケンブリッジにはいろいろな国から研究者が集まっており、ティータイム(英国では日に2回お茶の時間あり)に、研究や生活の話などがたくさん出来ました。そしてこの中から新しい発想が生まれてきました。各国の友達もできて、その後もお互いの国を訪問するなど、交流が続いています。研究に国境はない!

## 海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

私の英国でのボス夫妻(教授と講師)は、カエルの発生や生殖細胞の研究をしていました。研究所は寄付講座で、研究者は一定期間毎に外部評価を受け、研究費継続の有無を判断されます。技術補佐員や中央集中施設が、試薬作り・器具の洗浄・共通利用機器の操作等のサービスを提供してくれるので、研究者は雑用がなく、自由な発想でアイデアを生み、さかんにディスカッションや共同研究をしてアイデアを実現することができました。ただ、教授のポストは非常に少なく、ボス夫妻はその後、奥さんの教授ポストを求めて、米国に移住しました。

## 海外留学・勤務を決めたきっかけについて

研究者である夫と共に、一度は海外で研究をしてみたいと思っていました。ちょうどうまく、夫が英国ケンブリッジにある英国医学研究所(MRC)に、私はケンブリッジ大学 Wellcome/CRC 発生・がん研究所に、2年間ダブル留学することができました(半年のずれあり)。子供2人は地元の小学校に入りました。私は最初の年はJST ERATO 古沢プロジェクトから派遣の形にいただき、2年目はWellcome財団の資金を獲得して、ケンブリッジ大学に雇われる形(助手のようなもの)になりました。

## 滞在先の思い出・生活者としての体験

私の英国でのボス夫妻には、4人の子供があり、その昔は研究室に赤ちゃん連れで出勤していたこともあったそうです。留学時には子供は中高小学生だったので、夕飯時に一度帰宅し、夜また研究室に来ていました。当時は私も同じような生活パターンでした。子供達は小学校が終わると友達のお母さん(ナニー)の家で夕方まで預かってもらっていました。ケンブリッジは職住接近が可能です。研究と生活を両立しやすかったです。女性ボスドクや院生も多くいて、女性研究者の少ない日本と比べて「息がしやすいな」と感じていました。

## &lt;野呂知加子(のろちかこ)プロフィール&gt;

フェリス女学院中学・高校 → 千葉大理学部生物学科 → 京都大大学院理学研究科生物物理学専攻博士課程<結婚・第一子出産> → 修士(理学博士) → 国立精神・神経センター流動研究員<第二子出産> → JST・ERATO古沢発生遺伝子プロジェクト研究員・グループリーダー → 英国ケンブリッジ大学シニアリサーチアソシエイト → JSTさきがけ研究21「細胞と情報」領域研究員 → 理化学研究所脳総研・バイオリソースセンター → 現職



英国にて友人家族と